

悲しみを分かち合うために

丸岡邦明

第1回 初めての涙

次男（愛称ひろくん）は今年6歳になりました。彼が3歳の時のことです。僕がビデオで映画の「グッバイ・ママ」を見ていると、ラストの松阪慶子と少年が成田空港で別れるシーンで、いつの間にか一緒に見ていたひろくんが涙ぐんでいました。驚いて「ひろくん、泣いてるの」と言うと、恥ずかしそうにして、照れ隠しに僕を叩くのです。子供は泣くのが仕事みたいなものですが、それはフラストレーションの表現としての涙です。3歳の子供が大人と同じような感動の涙を流すなんて、思いもよらず、わが子の成長に感心してしまいました。

7年前に小児癌で死んだ長男にも、そういう意味での初めての涙がありました。

長男は4歳の年の12月に発病し、一旦は寛解しましたが、翌年の4月末に再発が見つかりました。再寛解に向けた治療はゴールデン・ウィーク明けから始めることになり、連休中は一時退院することが許されました。そこでこの間に、1泊2日で福岡市郊外にある海の中道海浜公園に行きました。

海の中道海浜公園は、葛西臨海公園の3、4倍の広さを持ち、子供の広場や動物の森、プール、大観覧車などを備えた建設省の総合公園です。池のほとりで弁当を広げました。食欲は細いけれど、長男は元気に遊んでいました。周囲にはゴールデン・ウィークの行楽を楽しむ家族連れやアベックがいました。それに混じって楽しそうに遊ぶ長男を見ると、妻と二人で泣いてしまいました。大観覧車とボートに乗り、池の鯉にえさをやりました。

その日は、オープンして間もないホテル海の中道に泊まりました。海を眺望する広々とした客室で、

長男はすっかりはしゃいでいました。それまでゆっくり話し合う時間の持てなかった私と家内は、長男がテレビを見ている間に、その横で今後の治療方針を相談しました。最大の課題は、再寛解導入のための治療を本当に受けるか、QOLのために治療を辞退するか、でした。その時点では、長男にはまだ再発のことは話していませんでした。

そのあと家内は大浴場に行きました。このホテルは、プールやマリナー、テニスコートのあるリゾート・タイプですが、なぜか大浴場もあるのです。ところが、家内が部屋を出て行った後、テレビを見る長男の様子がおかしいのでよく見ると、鼻をすすりながら涙をしきりにふいているのです。声をかけると、顔をテレビに向けたまま、私にしがみついてきました。テレビに夢中になっているとばかり思っていたのですが、心の中は病気への恐怖でいっぱいであることが感じられました。今後の方針について話し合う私と家内の雰囲気から、病気が重大な事態になっていることを子供なりに気づいたんだと直感しました。私は、映画のワンシーンみたいに言葉もなく長男を抱きしめました。

身体的成長は化学療法のために停滞していても、精神面、情緒面は急速に成長していたのです。これが、赤ちゃんの涙でない初めての涙を長男が見せた記念日です。

長男は、それから71日後に死にました。

1993年6月16日

第2回 天国へのリュックサック

長男の雅一（まさかず、当時4歳）は、外出する時、自分の荷物をリュックサックに入れて持ち歩く習慣にしていました。服を汚した時に備えての着替え、おやつ、飲物、ウェット・ティッシュ、ポケット・ティッシュなどが「標準装備品」です。乗り物に長時間乗る場合などは、それにさらに小さいおもちゃが加わることもあります。僕の持ち物がポケットに入れるには多く、鞆に入れるには少ない場合などは、僕の持ち物まで入れてもらって僕は手ぶらを決め込むこともありました。（笑）

彼の一番愛用したリュックは、ポケットの所に兎の絵のついているとても可愛いものです。彼がリュックを背負うということは、行楽や買物、外食など楽しい外出の場面であることが多いので、リュックは彼にとっても私たちにとっても、なにか楽しいことを連想させます。

雅一は外遊びが好きな子供なので、我々はしょっちゅう外出させられます。家内はその度にリュックを調えるので、急に外出を思い立っても、パッパッと手際よくリュックを用意するようになりました。

1987年7月9日に雅一は死にました。物を言わなくなった雅一とともに、僕はターミナルを見ていただいた病院から、久しぶりに自宅に戻りました。その年は、春から鳴き始めた鶯がまだ鳴き続けていて、蝉と鶯の声が一緒に聞こえる不思議な年でした。廊下の窓を開けると、どういふわけか蝉が一匹網戸にとまったまま死んでいました。雅一が飼っていた甲虫は、誰も世話をする人がいなくなったので、やはり死んでいました。

葬儀が終わると、出棺に先立って「お別れ」がありますね。僕が、雅一の好きだった「ぼくのいもうと」という絵本を棺に入れておくと、家内がリビングの方から例のリュックを持って来ました。僕は、彼が好きだった絵本やおもちゃを棺に入れることは考えましたが、リュックを持たせることは思いつきませんでした。

「着替えもジュースも入ってるからね」

と言いながら、家内はそれを棺に入れました。雅一には甘いものを厳しく制限して育てていたので、ジュースを飲ませてもらえるというのは大サービスです。（笑）

「元気でねー」

「ジュースは好きな時飲んでいいからね」

と、こんなことを言ったかどうか、細かいことはもう憶えていませんが、とにかく、口々に初めて

独りでお出かけする子に言葉をかけました。パジャマも入れました。死んだ蝉と甲虫も入れました。それから棺の蓋が閉じられました。

あの時靴を入れるのを忘れた（笑）、と家内は後になって述懐しています。普通の外出なら靴は雅一が自分で履くから、忘れていたのだと思います。雅一が迎えられなかった5歳の誕生日を、次男のカタツムリ（仮名）はもうすぐ迎えようとしています。

1993年7月25日

第3回 タイムスリップして来た手形

雅一が死んでも（享年4歳、小児癌）、わが家には彼のおもちゃ箱があり、雅一の組み立てたレゴのブロック、紙の工作がいたるところにありました。それらをいつまでもそのまましておくわけにも行かないので、片付けなければなりません。この作業は、いふなれば雅一がこの家で生活していた痕跡を消し、この家の中の雅一の居場所をなくして行くことにほかなりません。私達の心の中には、まだ雅一の死を認めたくないという気持ちがあり、もし雅一が帰ってきた時に彼の席がなかったら可愛そうだという気持ちがあるので、この作業は本当につらいものでした。

そういう整理も一通り終わり、忌引日数をかなり超過して休んだ後、僕はまた会社に出始めました。通勤には車を使っていたのですが、ある時、全く偶然に、フロント・ガラスの助手席側の内面に、汚れた手で触った跡がついているのを見つけたのです。それは普段は見えません。光がフロント・ガラスに対して斜めに入射して、しかも背景が黒いという条件が重なった時にだけ見えます。犯人は雅一です。

雅一は助手席の前に立って景色を眺めるのが好きでした。僕としては、後部座席の左側にシートベルトをして座らせたいのですが、彼は飽きてくるとうとう助手席へ行きたがるのでした。彼が指定席に立つと、体の安定を保つために、手はどうしてもダッシュボードの上に置かれることとなります。前から見ると、ダッシュボードに手をかけて顔を覗かせている（笑）、そんな恰好になります。そして、飽っぱい雅一くんがいつまでもそれだけで満足するはずはない（笑）ので、お菓子を食べたり、飲物を飲んだりし始めます。その結果、飲物やお菓子で汚れた手で、フロントガラスに触って景色

を指さしたりするので、フロントガラスの助手席側に、小さい手でベチャーッと汚らしく描いた図形がついてしまうというわけです。

ですから、僕は車にワックスをかけたことは一度もなかったのですが、ガラス、特にフロントガラスは内外面とも時々拭くようにしていました。

雅一の死後思いがけずそれを見つけた時は、奇妙な気分でした。手形と呼ぶにはあまりに細長く、正にベチャーッとした感じの模様です。ただ、小さな手の痕跡らしいものがあって、確かにこれが雅一の手で描かれたものであることを物語っていました。一瞬、ほんの一瞬、雅一がまだ元気で生きていた頃の日常の感覚が蘇りました。「汚い手で触ったらだめじゃないか」と言ったら、「僕じゃないのにー、もー」とかなんとか反抗しながら雅一が出て来るような気がしました。涙は出ませんでした、いとおしきで胸がいっぱいになりました。

それ以来フロントガラスの内側は拭かないように気をつけていたのですが、拭かなくても他の汚れが隠して行くらしくて、次第に見えなくなっていました。

1993年8月10日

第4回 恋の切なさ

僕は、病院でボランティア活動をしています。あるとき入院患者さんを対象にした映画会で、「男はつらいよ・寅次郎の休日」（山田洋次監督、1990年松竹）をやったことがあります。長男雅一（まさかず、4歳、小児癌）が死んでから5年近くたった頃になります。

寅さんの甥の満男（吉岡秀隆）は大学に入ったものの、パツとしない毎日を送っています。そこへ、満男の後輩で、名古屋で母親と暮らしている泉（後藤久美子）が、離婚した父に会うため上京してきます。満男は泉が好きなのですが、泉の方は、両親が離婚して母は水商売という状態のため、落ち込んでいて満男の好意を受けとめかねています。父親が東京の仕事を辞めて、新しい女と暮らすために九州の日田に行ったと聞かされた泉は、名古屋に帰らず、日田に向います。博多行きの新幹線に乗る泉を東京駅に見送りに来た満男は、ドアが閉まる寸前、衝動的に乗り込んでしまいます。あつけにとられる泉。

「泉独りでは心配だし、バイトで金が入ったばかりだから日田まで一緒に行く」と宣言する満男。

ここはまあ感動的なシーンで、誰でもうっとりすると思いますが、僕は、普通の人ならたぶん見過ごすその次のシーンでぐっときてしまいました。

満男は泉とデッキで向い合っていますが、さりげなく泉のバッグ（もとは名古屋から東京への旅支度だったから、そんなに大きくない）を持ってやりませぬ。泉は黙ってされるがままにしています。ただそれだけのシーンです。

泉の荷物は人に持ってもらうにしてはちょっと小さいので、それを満男が持つという行動にはほんのちよっぴり不自然さがあります。この不自然さから、僕は、愛する泉のためになにかせすにはられない満男の切なさを感じました。

映画には「台詞のない台詞」という演出があります。ターミナル・ケアの用語で言えばノンバーバル・コミュニケーション（非言語的意思疎通）に当たるでしょうか。ここにそれがあります。満男と泉の間になんら特別の感情がなければ、そんな小さい荷物を満男は持ったりしないし、仮に満男が持とうとしても泉は「これくらい持てるからいいよ」と断わるはずです。持ってやるには不自然な小ささの荷物を持つ、という満男の行為は、実は泉に向かって「きみのこと、愛している」と語っていると思います。そして、それを拒まずに黙って荷物を渡した泉の行為は、「ありがとう。あなたの気持ち、嬉しい」と語っていると思います。

このシーンには、恋をする若い男と女の、苦しみとも幸福ともつかない切なさがこめられています。僕は、映画会の会場の後ろでドア番をしながらそれを見ながら、「雅一はこういう気持ちを一度も経験することなく逝ってしまったなあ」と思い、泣きました。

1993年8月24日

第5回 絵画の前の分かち合い

雅一（まさかず、4歳、小児癌）が死んで1年あまりたった頃、僕はヨーロッパに2回目の海外出張をしました。アムステルダム滞在中の仕事の合間に、フィンセント・ファン・ゴッホ美術館に行きました。ここには、ゴッホの他にも印象派の有名な作品がいっぱいあって、見事でした。

2階か3階のコーナーの近くにある小さな絵を見た時、僕は「？」と考え、次にあっと思いました。手前から遠方に向かって道が延び、そこを進む行列を後ろから描いてあります。行列の先頭には長細い箱が掲げられ、人々がうなだれているので、葬儀の列らしいとわかります。僕があれと思ったのは、列をなす人物がほとんど子供であるということでした。後向きなので表情はわかりませんが、後ろ姿にも悲しみを感じさせる大勢の子供たちが、行列をなして向こうへ歩いていきます。そう、これは子供の葬儀なのです。

僕がその絵の前で足を止めると、もうひとりその絵に見入って泣いている女性がいました。彼女の連れの女性は、なにやら僕には理解できないオランダ語で泣いている女性を叱って、行ってしまいました。たぶん、「いつまで悲しんでいるのよ。早く忘れなさい」というようなことを言ったのでしょう。泣いている女性も子供を亡くしたのでしょうか。これを描いた画家も、自分自身か、少なくとも誰か身近にそういう体験があって、思うところあってこういう絵を描いたのでしょうか。

この絵が描かれてから今日まで、何人の人がこの絵の前で、この女性や僕のように亡きわが子を偲んだことでしょうか。この絵の前で静かな分かち合いが行なわれてきたと言えるかもしれません。

この時の出張では、仕事が終わってから、帰国のフライトの都合で、コペンハーゲンに泊りました。翌日の出発まで少し時間があるので、王宮を見物に行ったら、思いがけず王宮軍楽隊の行進に巡り会いました。有名なバッキンガム宮殿の衛兵と似た格好の兵隊のブラスバンドは見事でした。それはあたかもおもちゃの兵隊を思わせて、僕は「雅一にもこれを見せたかった」と目頭が熱くなりました。あの瞬間の、北欧の灰色の風景の中に鮮やかに浮かび上がった色彩と音が、ストップ・モーションのようにいつまでも頭に残っています。

それから、5回目の欧州出張の時だったか、ウィーン郊外のある教会を訪れた時のことです。片隅に置かれた聖母マリアの像に僕は目を惹かれました。ガイドの学生君は何も説明しなかったから、文化財的には大した価値のあるものではないのですが、僕は感動してしまいました。そのマリアは十字架にかけられたイエスの遺骸を胸に抱いて悲しんでいました。この像は聖書の物語の一部であると同時に、子を亡くした母の悲しみの像でもあるのです。その表情は、今死んだばかりの子を抱いて呆然とする母の表情です。

そういえば、同じようなことをマドリードのプラド美術館を見学した時にも感じました。プラド美術館所蔵の絵画には聖書を題材にしたものが多いのですが、イエスの受難は感動的でした。子を失った母としてのマリアの気持ちはどんなであったろうか、と思うのです。やっと十字架から下ろされたイエスに弟子や女たちが嘆きながら集まる。その中にマリアがいて、イエスの体にすがってよよと泣く、そういう場面を多くの画家が描いています。それらの絵画に描かれたマリアは、愛する者を亡くした人々に、「あなたの愛する方が死んだのですか。私の愛するイエスもこんな死に方をしました。お互いになんと辛い目にあったんでしょね。さあ、私と一緒に泣きましょう」と語りかけるかのようなのです。

1993年9月4日

最終回 未来からの贈り物

ある知人と、乗り慣れた車への愛着について語り合いました。2年前に買い換えるまで乗っていたビスタの1800セダンは、僕にとって一番たくさん思い出のつまった車でした。

乗っていた期間が8年と長いこともありますが、僕にとっては病気で死んだ雅一（長男、小児癌）の思い出がいっぱいあるからです。

赤ちゃんの時から始めて、高速道路やフェリーで、当時住んでいた北九州市から僕の郷里の京都へ帰省するとき。初めて九州がんセンターへ連れていったとき。何度かの入退院。最後の入院。…と、僕と雅一の生活はこの車とともにありました。つまりこの車は、雅一の誕生から5歳直前の死までを見守っていたことになります。

雅一は後部座席左側にすわるのが多くて、家内がアテンドせずに2人だけで乗る時は、危ないことをしていないかとか、飲物をこぼしていないかとか、時々振り返って見る必要がありました。病気になるってからは、静かだとそれもまた心配で、僕は時々振り返っていました。だから死後もしばらくは、運転席から振り返るとそこにまだ雅一が座っているような気がしました。

前にも書きましたが、フロントガラスの内側に雅一が汚れた手につけた手形を、死後何日もたつてから見つけたこともあります。それが妙に生々し

くて、今にも雅一がドアを開けて入ってきそうな気がしました。

この車は次男の誕生も見ました。

そんなですから、買い換えてディーラーのセールスマンがそれを引き取って行った時は、とても悲しかったです。

しかし、執着はあるものの、そういう「過去」をいつまでもとどめておこうとは僕は思いません。確かに何度も何度も感傷にひたりましたが、そのうちに「もういい」と思える時が来ると、終わったものは捨てていきます。本でもレコードでも、僕は集めるという趣味はありません。人との交際も、わりと淡泊で流動的です。卒業や転勤といった変化で会えなくなった人々とのパイプを努力して維持しようとも思いません。だから年賀状も書きません。生活や状況の変化は避けられないし、別れも避けられないから、いまここで誰かと分かち合っている時間を、最大限に大切にしたいのです。

大学や若い時のかけがえのない時代の思い出の品もいっぱいありましたが、折にふれて整理して捨てました。そういうものを段ボール箱につめて倉庫に保管している人もありますが（そういう生き方もあっていいと思いますが）、僕はできるだけそういう「過去」からは物理的にも精神的にも身軽でいたいと思っています。そうしないと今を楽しめないでしょ。

「魔女の宅急便」で、修行に出発するキキが自分の心境を「贈り物を開ける時みたいにワクワクしてるわ」とジジに語るシーンがあります。まだ見ぬ未来をこのように楽しみに待つか、不安のうちに待つか、どちらが気持ちよいかということです。

過去に素晴らしいものがあったことはわかっている。だが、それはもう終わったことなのです。未来にどんな素晴らしい出会いや出来事が待っているかはわからない。でも、それは確実にこれから与えられるものなのです。

なら、僕はキキのように、それをワクワクして待ちたいと思います。

僕は、古い物を大切にするライフスタイルを否定しているわけではありません。その魅力も好きです。ただ、たまたま今の僕は、未来からの贈り物をしっかり受け取るために、過去からはできるだけ身軽にしておくことが心地よい、それだけです。

ついでに言いますと、叶わぬ夢や「逢いたい時にあなたはこない」状態などはありますが、僕は今しあわせです。髪は薄くなるし、軽薄でHですが、僕は自分が好きです。（笑）

1994年6月25日

終わり